

出羽三山における山岳信仰

出羽三山とは、羽黒山 (414 m)、月山 (1,984 m)、湯殿山 (1,500 m) の総称です。出羽三山には、修験道の信者にとって重要な巡礼地として、1,400 年の歴史があると言われています。修験道とは、山で修行に努める古くからの伝統であり、仏教と神道両方の要素を含んでいます。この秘教的な信仰体系は、6 世紀以降に発展し、その後現代の神道へと組み込まれていきました。

出羽三山における山岳信仰の起源

羽黒山で生まれた修験道の伝統は、山で修行に努めるという、この宗教の最古の形態だと考えられています。伝説によると、この修験道は、第 32 代天皇である崇峻天皇の息子である蜂子皇子が 593 年に創始したものです。蜂子皇子は、父親が暗殺された後、当時の都だった奈良の自邸から逃れました。三本足のカラスが、彼を羽黒山へと導いたと言われています。当時の羽黒山は未開の地でした。彼が山上にいる時に菩薩が現れ、この山と、そこに住む神仏を信仰することに一生を捧げるよう彼を導きました。自然を崇めることが、修験道の中心にあります。岩、川、山といった自然の造形が、神の住む場所だと信じられているのです。

再生の旅

この伝統が始まって以来、修験道の行者 (修験者) たちは、出羽三山を巡礼してきました。「三関三渡」と呼ばれるこの巡礼は、再生の旅を象徴しています。山々を歩くことは神々の間を巡ることであり、それぞれの山は人生の旅の一部を表しています。羽黒山は現在 (現世) を象徴し、月山は過去 (死後) を象徴し、湯殿山は未来 (再生) を象徴しています。巡礼者たちは、数日をかけた巡礼から、精神の再生を達成して戻ってきます。

出羽三山の巡礼は、この再生を象徴するものに富んでいます。巡礼者たちは、出発の前に、宿坊 (巡礼者の宿) で葬儀に似た儀式に参加することで、古い自己を離れる準備をします。これが、「三関三渡」に旅立つ前に行われるのです。巡礼の際、修験者は伝統的な白装束を着ます。これは、死者が葬儀の際に着るものに似ています。

巡礼は、羽黒山のふもとにある下りの石段から始まります。この下りは、再生に向けた旅の最初の段階である死を象徴しています。修験者は、その後すぐに、川にかかった朱色の橋を歩いて渡ります。この橋がかけられるまでは、修験者は川を歩いて渡っていたのでしょ。川の渡りやすさが、その人の徳を表していました。川を渡りやすいほど、人生が清いものだった、ということです。そこから、修験者は、滝の下の川で身を清めて、再生への準備を始めます。この滝は人工のもので、修験者が自らの過去を流し去るための場所として、出羽三山の第 50 代住職である天宥別当 (1592~1674 年) が作ったとされています。彼は、出羽三山をより歩きやすくするために道を作ったことでも知られています。

羽黒山

修験者たちは、川で自らを清めた後、羽黒山に登り始めます。山頂に至る石段は、多くの素朴な彫刻で飾られており、酒杯や蓮の花などが彫られています。これらは、言い伝えによると、修験者が現世にあって集中力を保つよう促すために天宥が彫ったものだと言われています。修験者が彫ったものだとする説もあります。

出羽三山のそれぞれの山には神社があります。伝統的に、修験者たちは、これら3つの神社すべてを訪れてきました。しかし、雪が深い冬に月山や湯殿山に登ることはできないため、羽黒山にある「三神合祭殿」で、出羽三山の三体の神すべてに祈ることが可能です。羽黒山の降雪量はより少なく、年中訪れることができます。出羽三山の巡礼を試みる修験者たちは、この1つ目の神社で、巡礼の間のご加護を祈ります。この萱葺の「三神合祭殿」は1818年に建てられたもので、国の重要文化財に指定されています。

月山

羽黒山に登った後、巡礼者は月山の頂上を目指します。「三関三渡」の中で最も厳しい部分です。ここには、月の神である月読命が祀られています。

この山頂は、死後を表しています。高山に広がる湿原、山の険しい地形、および深い雪に覆われた溶岩石が、別世界のような雰囲気を作り出しています。修験者の間で月山に人気がある理由は、その荒々しい環境のためだとされてきました。修験者は、自給自足に価値を置いています。修験者は、月山の深い雪と強い風の中で身体的に厳しい修行を行い、月山の多様な植物を食料としてきた歴史があります。

湯殿山

湯殿山は、巡礼の最後の部分です。湯殿山は、未来と再生を表しています。巡礼は、この山のふもとにある神聖な湯殿山神社本宮で終わります。巡礼者は、この神社に詣でる前に、お祓いを受けなくてはなりません。写真撮影は固く禁じられています。